

関東を代表する 戦国末期の山城・多気城

栃木県立博物館 副館長 江田 郁夫



多気城遠景

日本百名山ならぬ、日本100名城をご存知だろうか。2006年に(財)日本城郭協会が選定した全国各地の名城で、栃木県からは足利市の足利氏館跡が唯一選出された。つづく続日本100名城には、佐野市の唐沢山城が認定されたものの、都合全国200の名城のうちのわずかふたつ、割合的には百分の一名城が栃木県の現状といえる。

観光地としての知名度や文化財・歴史上の重要性をもとに選出された現代の100名城に対し、江戸時代の武士が戦国時代の難攻不落の名城としてリストアップしたのが、関東七名城である。越後上杉氏の活

躍を記した軍記物語中の記述のため、地域・時期ともに限定つきではあるが、埼玉県の川越城(川越市)・忍城(行田市)、群馬県の前橋城(前橋市)・金山城(太田市)、茨城県の太田城(常陸太田市)とならんで、栃木県では唐沢山城と宇都宮城があげられている。以上の七名城中、前橋・太田・宇都宮城は現代の100名城には選出されておらず、名城の評価が時代につれて変化していることがわかる。

では、歴史的な重要性と難攻不落を条件に、戦国末期の関東の名城をひとつだけあげるとしたら、いっ一番に多気城を推薦したい。宇都宮の北西約9キロに位置する多気山(高さ377メートル)を1585年に城郭化した多気城は、太田城主佐竹義重らの全面的な支援のもとで、宇都宮城主宇都宮国綱によって築かれた。当時、小田原北条氏の北関東侵略に対抗していた佐竹・宇都宮氏らの連合軍(東方の衆・味方中とも)にとって、多気城は最重要の防衛拠点であり、佐竹・宇都宮氏らのみならず、存亡をかけて築いた巨大山城になる。

南衆と通称された北条軍のたび重なる侵攻にもかかわらず、多気城に拠る宇都宮氏らはこれをことごとく撃退しつづけた。多気山の麓には、「扇町・埴田・下河原・源石町・裏町・粉河寺・清願寺」の小字が伝承されているが、これらは江戸時代の宇都宮城下町、扇町・下河原町・元石町・池上裏町などの前身であり、もともとは戦国時代の宇都宮城下に由来する。同じく粉河寺・清願寺も宇都宮氏ゆかりの寺院で、宇都宮の寺院や住民の多くが多気城下に移住していたことがあきらかとなる。多気城を攻めた北条方の武士が「新うつの宮」と称したように(「桜井家文書」、多気城とその城下は宇都宮氏のあらたな本拠として整備が進んでいた。ところが、1590年の豊臣秀吉の小田原攻めで仇敵北条氏は滅亡し、この結果、宇都宮国綱は本拠を宇都宮城に復すると同時に、難攻不落を誇った多気城も実働5年でその役割を終えることになった。



山頂からの眺望 宇都宮市街を望む